

# 源氏物語

葵

紫式部

青空文庫



恨めしと人を目におくこともこそ身の

おとろへにほかならぬかな　（晶子）

天子が新しくお立ちになり、時代の空気が変わってから、源氏は何にも興味が持てなくなっていた。官位の昇進した窮屈きゆうくつさもあつて、忍び歩きももう軽々しくできないのである。あちらにもこちらにも待つて訪とわれぬ恋人の悩みを作らせていた。そんな恨みの報いなのか源氏自身は中宮ちゆうぐうの御冷淡さを歎なげく苦しい涙ばかりを流していた。位をお退ひきになった院と中宮は普通の家の夫婦のように暮らしておいでになるのである。前の弘徽殿さきこきでんの女御にょご

である新皇太后はねたましく思召すのか、院へはおいでにならずに当帝の御所にばかり行つておいでになつたから、いどみかか  
る競争者もなくして中宮はお氣樂に見えた。おりおりは音楽の会な  
どを世間の評判になるほど派手はでにあそばして、院の陛下の御生活  
はきわめて御幸福なものであつた。ただ恋しく思召すのは内裏だいりに  
おいでになる東宮だけである。御後見をする人のないことを御心  
配になつて、源氏へそれをお命じになつた。源氏はやましく思い  
ながらもうれしかつた。

あの六条の御息所みやすどころの生んだ前皇太子の忘れ形見の女王が齋さいぐ  
宮うに選定された。源氏の愛のたよりなさを感じている御息所は、  
齋宮の年少なのに托たくして自分も伊勢いせへ下つてしまおうかとその時

から思っていた。この噂うわさを院がお聞きになつて、

「私の弟の東宮が非常に愛していた人を、おまえが何でもなく扱うのを見て、私はかわいそうでならない。齋宮なども姪めいでなく自分の内親王と同じように思っているのだから、どちらからいつても御息所を尊重すべきである。多情な心から、熱したり、冷たくなつたりしてみせては世間がおまえを批難する」

と源氏へお小言こごとをお言いになつた。源氏自身の心にもそう思われることであつたから、ただ恐縮しているばかりであつた。

「相手の名誉をよく考えてやって、どの人をも公平に愛して、女の恨みを買わないようにするがいいよ」

御忠告を承りながらも、中宮を恋するあるまじい心が、こんな

ふうにお耳へはいつたらどうしようかと恐ろしくなつて、かしこまりながら院を退出したのである。院までも御息所との關係を認めての仰せがあるまでになつていたのであるから、女の名譽のためにも、自分のためにも軽率なことはできないと思つて、以前よりもいつそうその恋人を尊重する傾向にはなつてゐるが、源氏はまだ公然に妻である待遇はしないのである。女も年長である点を恥じて、しいて夫人の地位を要求しない。源氏はいくぶんそれをよいことにしている形で、院も御承知になり、世間でも知らぬ人がないまでになつてなお今も誠意を見せないと女は深く恨んでいた。この噂うわさが世間から伝わつてきた時、式部卿しきぶきょうの宮の朝顔の姫君は、自分だけは源氏の甘いささやきに酔つて、やがては苦にがい悔いの中

に自己を見いだす愚を学ぶまいと心に思うところがあつて、源氏の手紙に時には短い返事を書くことも以前はあつたが、それももう多くの場合書かぬことになつた。そうといつても露骨に反感を見せたり、けいべつ軽蔑的な態度をとつたりすることのないのを源氏はうれしく思つた。こんな人であるから長い年月の間忘れることもなく恋しいのであると思つていた。左大臣家にいるあおい葵夫人（この人のことを主にして書かれた卷の名を用いて書く）はこんなふう

に源氏の心が幾つにも分かれているのを憎みながらも、たいしてほかの恋愛を隠そうともしない人には、恨みを言つても言いがないと思つていた。夫人は妊娠していて気分が悪く心細い氣になつていた。源氏はわが子の母になろうとする葵夫人にまた新し

い愛を感じ始めた。そしてこれも喜びながら不安でならなく思う舅夫婦しゅうととともに妊婦の加護を神仏へ祈ることにつとめていた。こうしたことがある間は源氏も心に余裕が少なく、愛してはいながらも訪ねて行けない恋人の家が多かつたであらうと思われる。

そのころ前代の加茂かもの齋院さいいんがおやめになつて皇太后腹の院の女三の宮が新しく齋院に定まつた。院も太后もことに愛しておいでになつた内親王であるから、神の奉仕者として常人と違つた生活へおはいりになることを御親心に苦しく思おぼしめ召したが、ほかに適当な方がなかつたのである。齋院就任の初めの儀式は古くから決まつた神事の一つで簡単に行なわれる時もあるが、今度はきわめて派手はでなふうに行なわれるらしい。齋院の御勢力の多少にこん



なこともよるらしいのである。御禊ごけいの日に供奉ぐぶする大臣は定員のほかに特に宣旨せんじがあつて源氏の右大将をも加えられた。物見車が出ようとするとする人たちは、その日を楽しみに思い晴れがましくも思つていた。

二条の大通りは物見の車と人とで隙すきもない。あちこちにできたさしき棧敷は、しつらいの趣味のよさを競つて、御簾みすの下から出された女の袖口そでぐちにも特色がそれぞれあつた。祭りも祭りであるがこれらは見物する価値を十分に持っている。左大臣家にいる葵夫人はそうした所へ出かけるようなことはあまり好まない上に、生理的に悩ましいころであつたから、見物のことを、念頭に置いていなかったが、

「それではつまりません。私たちどうして見物に出ますのではみじめで張り合いがございません、今日はただ大将様をお見上げすることに興味が集まっておりまして、労働者も遠い地方の人までも、はるばると妻や子をつれて京へ上つて来たりしておりますのに奥様がお出かけにならないのはあまりでございます」

と女房たちの言うのを母君の宮様がお聞きになつて、

「今日はちようどあなたの気分もよくなつてのことだから。出ないことは女房たちが物足りなく思うことだし、行つていらつしやい」

こうお言いになつた。それでにわかともまわに供廻りを作らせて、葵夫人は御禊みそぎの行列の物見車の人となつたのである。邸やしきを出たのは

ずっと朝もおそくなってからだだった。この一行はそれほどたいそうにも見せないふうで出た。車のこみ合う中へ幾つかの左大臣家の車が続いて出て来たので、どこへ見物の場所を取ろうかと迷うばかりであった。貴族の女の乗用らしい車が多くとまっていた、つまりぬ物の少ない所を選んで、じやまになる車は皆除けさせた。その中に外見はそとみ網代車あじろぐるまの少し古くなった物にすぎぬが、御簾の下のとばりの好みもきわめて上品で、ずっと奥のほうへ寄って乗った人々の服装の優美な色も童女の上着の汗衫かぎみの端の少しずつ洩もれて見える様子にも、わざわざ目立たぬふうにして貴女きじよの来ていることが思われるような車が二台あった。

「このお車はほかのとは違う。除のけられてよいようなものじやな

い」

と言つてその車の者は手を触れさせない。双方に若い従者があつて、祭りの酒に酔つて気の立つた時にすることはなはだしく手荒いのである。馬に乗つた大臣家の老家従などが、

「そんなにするものじゃない」

と止めているが、勢い立つた暴力を止めることは不可能である。齋宮さいくうの母君の御息所みやすどころが物思いの慰めになろうかと、これは微行で来ていた物見車であつた。素知らぬ顔をしていても左大臣家の者は皆それを心では知っていた。

「それくらいのことではいばらせないぞ、大将さんの引きがあると  
思ふのかい」

などと言うのを、供の中には源氏の召使も混じっているから、抗議をすれば、いつそう面倒めんどうになることを恐れて、だれも知らない顔を作っているのである。とうとう前へ大臣家の車を立て並べられて、御息所の車は葵夫人の女房が乗った幾台かの車の奥へ押し込まれて、何も見えないことになった。それを残念に思うよりも、こんな忍び姿の自身のだれであるかを見現わしてののしられていることが口惜くちおしくてならなかった。車の轆ながえを据すえる台なども脚あしは皆折られてしまつて、ほかの車の胴へ先を引き掛けてようやく中心を保たせてあるのであるから、体裁の悪さもはなはだしい。どうしてこんな所へ出かけて来たのかと御息所は思うのであるが今さらしかたもないのである。見物するのをやめて

帰ろうとしたが、他の車を避けて出て行くことは困難でできそうもない。そのうちに、

「見えて来た」

と言う声があった。行列をいうのである。それを聞くと、さすがに恨めしい人の姿が待たれるというのも恋する人の弱さではなからうか。

源氏は御息所の来ていることなどは少しも気がつかないのであるから、振り返ってみるはずもない。気の毒な御息所である。前から評判のあつたとおりに、風流を尽くした物見車にたくさんの女の乗り込んでいる中には、素知らぬ顔は作りながらも源氏の好奇心を惹くのもあつた。微笑を見せて行くあたりには恋人たち

の車があつたことと思われる。左大臣家の車は一目で知れて、こは源氏もきわめてまじめな顔をして通つたのである。行列の中の源氏の従者がこの一団の車には敬意を表して通つた。侮辱されていることをまたこれによつても御息所はいたましいほど感じた。

影をのみみたらし川のつれなさに身のうきほどぞいとど知らるる

こんなことを思つて、涙のこぼれるのを、同車する人々に見られることを御息所は恥じながらも、また常よりもいつそうきれいだつた源氏の馬上の姿を見なかつたならとも思われる心があつた。

行列に参加した人々は皆分ぶん相応おんに美しい装いで身を飾っている中  
でも高官は高官らしい光を負っていると見えたが、源氏に比べる  
とだれも見栄みばえがなかつたようである。大将の臨時の隨身を、殿  
上にも勤める近衛このえの尉じようがするようなことは例の少ないことで、何  
かの晴れの行幸などばかりに許されることであつたが、今日は蔵く  
人ろうどを兼ねた右近衛うこんえの尉うが源氏に従つていた。そのほかの隨身も  
顔姿ともによい者ばかりが選ばれてあつて、源氏が世の中で重ん  
ぜられていることは、こんな時にもよく見えた。この人にはなび  
かぬ草木もないこの世であつた。壺装束つぼしようぞくといつて頭の髪の上  
から上着をつけた、相当な身分の女たちや尼さんなども、群集の  
中に倒れかかるようになって見物していた。平生こんな場合に尼



などを見ると、世捨て人がどうしてあんなことをするかと醜く思われるのであるが、今日だけは道理である。光源氏を見ようとす  
るのだからと同情を引いた。着物の背中を髪でふくらませた、卑  
しい女とか、労働者階級の者までも皆手を額に当てて源氏を仰い  
で見て、自身が笑えばどんなおかしい顔になるかも知らずに喜ん  
でいた。また源氏の注意を惹くひはずもないちよつとした地方官の  
娘なども、せいっぱいに装った車に乗って、氣どつたふうで見  
物しているとか、こんないろいろな物で一条の大路はおおじうずまつて  
いた。源氏の情人である人たちは、恋人のすばらしさを眼前に見  
て、今さら自身の価値に反省をしいられた気がした。だれもそう  
であった。式部卿の宮はさじき棧敷で見物しておいになつた。まぶし

い気がするほどきれいになっていく人である。あの美に神が心を惹ひかれそうな気がすると宮は不安をさえお感じになった。宮の朝顔の姫君はよほど以前から今日までも忘れずに愛を求めてくる源氏には普通の男性に見られない誠実さがあるのであるから、それほど志を持った人は少々欠点があつても好意が持たれるのに、ましてこれほどの美貌びぼうの主であつたかと思うと一種の感激を覚えた。けれどもそれは結婚をしてもよい、愛に報いようとまでする心の動きではなかつた。宮の若い女房たちは聞き苦しいまでに源氏をほめた。

翌日の加茂祭りの日に左大臣家の人々は見物に出なかつた。源氏に御禊みそぎの日の車の場所争いを詳しく告げた人があつたので、源

氏は御息所みやすどころに同情して葵夫人の態度を飽き足らず思った。貴婦人としての資格を十分に備えながら、情味に欠けた強い性格から、自身はそれほどに憎んではいなかったであろうが、そうした一人の男を巡って愛の生活をしている人たちの間はまた一種の愛で他を見るものであることを知らない女主人の意志に習って付き添った人間が御息所を侮辱したに違いない、見識のある上品な貴女である御息所はどんなにいやな気がさせられたであろうと、気の毒に思つてすぐに訪問したが、齋宮がまだ邸やしきにおいでになるから、神への遠慮という口実で逢あつてくれなかつた。源氏には自身までもが恨めしくてならない、現在の御息所の心理はわかつていながらも、どちらもこんなに自己を主張するようなことがなくて柔ら

かに心が持てないのであろうかと歎息たんそくされるのであつた。

祭りの日の源氏は左大臣家へ行かずに二条の院にいた。そして町へ見物に出て見る気になつていたのである。西の対へ行つて、  
惟これみつ光に車の用意を命じた。

「女連も見物に出ますか」

と言いながら、源氏は美しく装うた紫の姫君の姿を笑顔えがおでながめていた。

「あなたはぜひおいでなさい。私がいっしょにつれて行きましようね」

平生よりも美しく見える少女の髪を手でなでて、

「先を久しく切らなかつたね。今日は髪そぎによい日だろう」

源氏はこう言つて、おんみようどう陰陽道の調べ役を呼んでよい時間を聞いたりしながら、

「女房たちは先に出かけるといい」

と言つていた。きれいに装つた童女たちを点見したが、少女らしくかわいくそろえて切られた髪すその裾が紋織はでの派手な袴はかまにかかつているあたりがことに目を惹ひいた。

「女によおう王さんの髪は私が切つてあげよう」

と言つた源氏も、

「あまりたくさんで困るね。おとな大人になつたらしまいにはどんなになろうと髪は思っているのだろう。」

と困つていた。

「長い髪の人といつても前の髪は少し短いものなのだけれど、あまりそろい過ぎているのはかえって悪いかもしれぬ」

こんなことも言いながら源氏の仕事は終わりになった。

「千尋<sup>ちひろ</sup>」

と、これは髪そぎの祝い言葉である。少納言は感激していた。

はかりなき千尋の底の海松房<sup>みるぶさ</sup>の生<sup>お</sup>ひ行く末はわれのみぞ見ん

源氏がこう告げた時に、女王は、

千尋ともいかでか知らん定めなく満ち<sup>ひ</sup>干る潮ののどけからぬ

に

と紙に書いていた。貴女らしくてしかも若やかに美しい人に源氏は満足を感じていた。

今日も町には隙間なく車が出ていた。馬場殿あたりで祭りの行列を見ようとするのであったが、都合のよい場所がない。

「大官連がこの辺にはたくさん来ていて面倒な所だ」

源氏は言つて、車をやるのでなく、停めるのでもなく、躊躇ちゆうちしている時に、よい女車で人がいっぱいに乗りにこぼれたのから、扇を出して源氏の供を呼ぶ者があつた。

「ここへおいでになりませんか。こちらの場所をお譲りしてもよ

ろしいのですよ」

という挨拶あいさつである。どこの風流女のすることであろうと思いながら、そこは実際よい場所でもあったから、その車に並べて源氏は車を据すえさせた。

「どうしてこんなよい場所をお取りになったかとうらやましく思いました」

と言うと、品のよい扇の端を折って、それに書いてよこした。

はかなしや人のかぎせるあふひ故神ゆゑのしるしの今日を待ちける



注連しめを張つておいでになるのですもの。

源典侍げんてんじの字であることを源氏は思い出したのである。どこま

で若返りたいたのであろうと醜く思つた源氏は皮肉に、

かざしける心ぞ仇あだに思ほゆる八十やそうち氏人になべてあふひを

と書いてやると、恥ずかしく思つた女からまた歌が来た。

くやしくも挿かざしけるかな名のみして人だのめなる草葉ばかり  
を

今日の源氏が女の同乗者を持っていて、簾みすさえ上げずに来ているのをねたましく思う人が多かつた。御禊の日の端麗だつた源氏が今日はいくつういふうに物見車の主になっている、並んで乗っているほどの人は並み並みの女ではないはずであるところなことを皆想像したものである。源典侍では競争者と名のつて出られても問題にはならないと思うと、源氏は少しの物足りなさを感じたが、源氏の愛人がいると思うと晴れがましくて、源典侍のようなあつかましい老女でもさすがに困らせるような戯じょうだん談もあまり言い出せないのである。

みやすどころ御息所の煩悶はんもんはもう過去何年かの物思いとは比較にならないほどのものになっていた。信頼のできるだけの愛を持っていな

い人と源氏を決めてしまいながらも、断然別れて齋宮について伊勢へ行つてしまうことは心細いことのようにも思われたし、捨てられた女と見られたくない世間体も気になった。そうかと言つて安心して京にすることも、全然無視された車争いの日の記憶がある限り可能なことではなかった。自身の心を定めかねて、寝てもさめても煩悶をするせいか、次第に心がからだから離れて行き、自身は空虚なものになつていふという気分を味わうようになって、病氣らしくなつた。源氏は初めから伊勢へ行くことに断然不賛成であるとも言ひ切らずに、

「私のようなつまらぬ男を愛してくださいましたあなたが、いやになりになつて、遠くへ行つてしまふという気になられるのはもつ

ともですが、寛大な心になつてくださつて変わらぬ恋を続けてくださることで、ぜんしよう前生の因縁をまтта全くしたいと私は願つている」

こんなふうになだけ言つて留めていたのであつたから、そうした物思いも慰むかと思つて出た御禊川みそぎがわに荒い瀬が立つて不幸を見たのである。

あおい葵夫人は物怪もののけがついたふうの容体で非常に悩んでいた。父母たちが心配するので、源氏もほかへ行くことが遠慮される状態なのである。二条の院などへもほんの時々帰るだけであつた。夫婦の中は睦まじいものではなかつたが、妻としてどの女性よりも尊重する心は十分源氏にあつて、しかも妊娠しての煩いであつたからあわれ憐みの情も多く加わつて、しゅほう修法やきとう祈祷も大臣家でする以外に

いろいろとさせていた。物怪もののけ、生靈いきりょうというようなものがた  
 くさん出て来て、いろいろな名乗りをする中に、仮に人へ移そう  
 としても、少しも移らずにただじつと病む夫人にばかり添ってい  
 て、そして何もはげしく病人を悩まそうとするのでもなく、また  
 片時も離れない物怪もののけが一つあった。どんな修験僧しゅげんそうの技術で  
 も自由にするのできない執念のあるのは、並み並みのもので  
 あるとは思われなかった。左大臣家の人たちは、源氏の愛人をだ  
 れかれと数えて、それらしいのを求めると、結局六条の御息所と  
 二条の院の女は源氏のことには愛している人であるだけ夫人に恨み  
 を持つことも多いわけであると、こう言つて、物怪に言わせる言  
 葉からその主を知ろうとしても、何の得るところもなかった。物

怪といつても、育てた姫君に愛を残した乳母めのとというような人、もしくはこの家を代々敵視して来た亡魂とかが弱り目につけこんでくるような、そんなのは決して今度の物怪の主たるものではないらしい。夫人は泣いてばかりいて、おりおり胸がせき上がってくるようにして苦しがるのである。どうなることかとだれもだれも不安でならなかった。院の御所からも始終お見舞いの使いが来る上に祈祷までも別にさせておいでになった。こんな光栄を持つ夫人に万一のことかなければよいとだれも思った。世間じゆうが惜しんだり歎なげいたりしているこの噂うわさも御息所を不快な気分にした。これまでは決してこうではなかつたのである。競争心を刺戟しげきしたのは車争いという小さいことにすぎないが、それがどれほど大き

な恨みになつてゐるかを左大臣家の人は想像もしなかつた。

物思ひは御息所の病をますます昂こじさせた。齋宮をはばかり、他の家へ行つて修法などをさせていた。源氏はそれを聞いてどんなふうが悪いのかと哀れに思つて訪ねて行つた。自邸でない人家であつたから、人目を避けてこの人たちは逢つた。本意ではなくて長く逢いに來なかつたことを御息所の氣も濟むほどこまごまと源氏は語つていた。妻の病状も心配げに話すのである。

「私はそれほど心配してゐるのではないのですが、親たちがたいへんな騒ぎ方をしていきますから、氣の毒で、少し容体がよくなるまでは謹慎を表していようと思つただけなのです。あなたが心を大きく持つて見ていてくださつたら私は幸福です」

などと言う。女に平生よりも弱々しいふうの見えるのを、もつともなことに思つて源氏は同情していた。疑いも恨みも氷解したわけでもなく源氏が帰つて行く朝の姿の美しいのを見て、自分はどうていこの人を離れて行きうるものではないと御息所は思つた。正夫人である上に子供が生まれるとなれば、その人以外の女性に持つている愛などはさめて淡いものになつていくであろう時、今のように毎日待ち暮らすことも、その辛抱しんぼうに命の続かなくなることであろうと、それでいてまた思われもして、たまたま逢つて物思いの決して少なくなはならない御息所へ、次の日は手紙だけが暮れてから送られた。

この間うち少し癒よくなつていたようでした病人にまたにわか



悪い様子が見えてきて苦しんでいるのを見ながら出られないのです。

とあるのを、例の上じょうず手な口実である、と見ながらも御息所は返事を書いた。

袖濡そでぬるるこひぢとかつは知りながら下おり立つ田子の自みづからぞ憂うき

古い歌にも「悔くやしくぞ汲くみそめてける浅ければ袖のみ濡るる山の井の水」とございます。

というのである。幾人かの恋人の中でもすぐれた字を書く人で

あると、源氏は御息所の返事をながめて思いながらも、理想どおりにこの世はならないものである。性質にも容貌ようぼうにも教養にもとりどりの長所があつて、捨てることができず、ある一人に愛を集めてしまうこともできないことを苦しく思った。そのまた返事を、もう暗くなつていたが書いた。

袖が濡れるとお言いになるのは、深い恋を持つてくださらない方の恨みだと思ひます。

あさみにや人は下り立つわが方かたは身もそぼつまで深きこひぢ  
を

この返事を口ずから申さないで、筆をかりてしますことはどれほど苦痛なことだかしれません。

などと言つてあつた。

葵の君の容体はますます悪い。六条の御息所の生霊であるとも、その父である故人の大臣の亡霊が憑ついているとも言われる噂うわさの聞こえて来た時、御息所は自分自身の薄命を歎なげくほかに人を咀のろう心などはないが、物思いがつのればからだから離れることのあるという魂はあるいはそんな恨みを告げに源氏の夫人の病床へ出沒するかもしれないと、こんなふうに悟られることもあるのであつた。物思いの連続といつてよい自分の生しょう涯がいの中に、いまだ今度ほど苦しく思つたことはなかつた。御禊みそぎの日の屈辱感から燃え立つ

た恨みは自分でももう抑制のできない火になってしまったと思つて  
いる御息所は、ちよつとでも眠ると見る夢は、姫君らしい人が  
美しい姿ですわつている所へ行つて、その人の前では乱暴な自分  
になつて、武者ぶりついたり撲なぐつたり、現実の自分がなしうるこ  
とでない荒々しい力が添う、こんな夢で、幾度となく同じ筋を見  
る、情けないことである、魂がからだを離れて行つたのであろう  
かと思われる。失神状態に御息所がなつてゐる時もあった。ない  
ことも悪くというのが世間である、ましてこの際の自分は彼らの慢ま  
んばよく罵欲を満足させるのによい人物であらうと思つと、御息所は名  
誉の傷つけられることが苦しくてならないのである。死んだあと  
にこの世の人へ恨みの残つた靈魂が現われるのはありふれた事実

であるが、それさえも罪の深さの思われる悲しむべきことであるのに、生きている自分がそうした悪名を負うというのも、皆源氏の君と恋する心がもたらした罪である、その人への愛を今自分はこんてい根柢から捨てねばならぬと御息所は考えた。努めてそうしようとしても実現性のないむずかしいことに違いない。

齋宮は去年にもう御所の中へお移りになるはずであつたが、いろいろな障さわりがあつて、この秋いよいよ潔齋生活の第一歩をお踏み出しになることとなつた。そしてもう九月からは嵯峨さがの野の宮へおはいりになるのである。それとこれと二度ある御禊の日の仕し度たくやしきに邸の人々は忙殺されているのであるが御息所は頭をぼんやりとさせて、寝て暮らすことが多かつた。邸の男女はまたこのこと

を心配して祈禱を頼んだりしていた。何病というほどのことはなくて、ぶらぶらと病んでいたのである。源氏からも始終見舞いの手紙は来るが、愛する妻の容体の悪さは、自分でこの人を訪ねて来ることなどをできなくしているようであつた。

まだ産期には早いように思つて一家の人々が油断しているうちに葵の君はにわかにに生みの苦しみにもだえ始めた。病気の祈禱のほかに安産の祈りも数多く始められたが、例の執念深い一つの物のけのけ怪だけはどうしても夫人から離れない。名高い僧たちもこれほどの物怪には出あつた経験がないと言つて困つていた。さすがに法力におさえられて、哀れに泣いている。

「少しゆるめてくださいいな、大将さんにお話しすることがありま

す

そう夫人の口から言うのである。

「あんなこと。わけがありますよ。私たちの想像が当たりますよ」

女房はこんなことも言つて、病床に添え立てたきちよう几帳の前へ源

氏を導いた。父母たちは頼み少なくなつた娘は、良人おっとに何か言い

置くことがあるのかもしれないと思つて座を避けた。この時に加

持をする僧が声を低くしてほけきよう法華經を読み出したのが非常にあり

がたい気のすることであつた。几帳の垂たれ絹ぎぬを引き上げて源氏が

中を見ると、夫人は美しい顔をして、そして腹部だけが盛り上が

つた形で寝ていた。他人でも涙なしには見られないのを、まして

良人である源氏が見て惜しく悲しく思うのは道理である。白い着

物を着ていて、顔色は病熱ではなやかになっている。たくさんな長い髪は中ほどで束ねられて、枕まくらに添えてある。美女がこんなふうでいることは最も魅惑的なものであると見えた。源氏は妻の手を取って、

「悲しいじやありませんか。私にこんな苦しい思いをおさせになる」

多くものが言われなかった。ただ泣くばかりである。平生は源氏に真正面から見られるととてもきまりわるそうにして、横へそらすその目でじつと良人を見上げているうちに涙がそこから流れて出るのであった。それを見て源氏が深い憐あわれみを覚えたことはいうまでもない。あまりに泣くのを見て、残して行く親たちのこと



を考えたり、また自分を見て、別れの堪えがたい悲しみを覚えるのであろうと源氏は思った。

「そんなに悲しまないでいらっしやい。それほど危険な状態でないとは私は思う。またたとえどうなっても夫婦は来世でも逢えるのだからね。御両親も親子の縁の結ばれた間柄はまた特別な縁で来世で再会ができるのだと信じていらっしやい」

と源氏が慰めると、

「そうじゃありません。私は苦しくてなりませんからしばらく法力をゆるめていただきたいとあなたにお願いしようとしたのです。私はこんなふうにしてこちらへ出て来ようなどとは思わないのですが、物思いをする人の魂というものはほんとうに自分から離れ

て行くものなのです」

なつかしい調子でそう言ったあとで、

歎なげきわび空に乱るるわが魂たまを結びとめてよ下がひの棲つま

という声も様子も夫人ではなかった。まったく変わってしまったているのである。怪しいと思つて考えてみると、夫人はすっかり六条の御息所になつていた。源氏はあさましかつた。人がいろいろな噂うわさをしても、くだらぬ人が言い出したこととして、これまで源氏の否定してきたことが眼前に事実となつて現われているのであつた。こんなことがこの世にありもするのだと思うと、人生が

いやなものに思われ出した。

「そんなことをお言いになつても、あなたがだれであるか私は知らない。確かに名を言つてごらんなさい」

源氏がこう言つたのちのその人はますます御息所そつくりに見えた。あさましいなどという言葉では言い足りない悪感おかんを源氏は覚えた。女房たちが近く寄つて来る気配けはいにも、源氏はそれを見現わされはせぬかと胸がとどろいた。病苦にもだえる声が少し静まつたのは、ちよつと楽になつたのではないかと宮様が飲み湯を持たせておよこしになつた時、その女房に抱き起こされて間もなく子が生まれた。源氏が非常にうれしく思つた時、他の人間に移してあつたのが皆口惜くちおしがつて物怪は騒ぎ立つた。それにまだ後あとざ

産も済まぬのであるから少なからぬ不安があつた。良人と両親が神仏に大願を立てたのはこの時である。そのせいであつたかすべてが無事に済んだので、叡山の座主をはじめ高僧たちが、だれも皆誇らかに汗を拭い拭い歸つて行つた。これまで心配をし続けていた人はほつとして、危険もこれで去つたという安心を覚えて恢復の曙光も現われたとだれもが思つた。修法などはまた改めて行なわせていたが、今目前に新しい命が一つ出現したことに対する歡喜が大きくて、左大臣家は昨日に変わる幸福に満たされた形である。院をはじめとして親王方、高官たちから派手な産養の賀宴が毎夜持ち込まれた。出生したのは男子でさえもあつたからそれらの儀式がことさらはなやかであつた。

六条の御息所みやすどころはそういう取り沙汰ざたを聞いても不快でならなかった。夫人はもう危あぶないと聞いていたのに、どうして子供が安産できたのであろうと、こんなことを思つて、自身が失神したようにしていた幾日かのことを、静かに考えてみると、着た衣服などにも祈りの僧が焚たく護摩ごまの香かが沁しんでいた。不思議に思つて、髪を洗つたり、着物を変えたりしても、やはり改まらない。御息所は世間で言う生いきり霊りょうの説の否認しがたいことを悲しんで、人がどう批評するであろうかと、だれに話してみることもないだけに心一つで苦しんでいた。いよいよ自分の恋愛を清算してしまわないではならないと、それによつてまた強く思うようになった。

少し安心を得た源氏は、生霊をまざまざと目で見、御息所の言

葉を聞いた時のことを思い出しながらも、長く訪ねて行かない心  
苦しさを感じたり、また今後御息所に接近してもあの醜い記憶が  
心にある間は、以前の感情でその人が見られるかということとは自  
身の心ながらも疑わしくて、苦悶くもんをしたりしながら、御息所の体  
面を傷つけまいために手紙だけは書いて送った。産前の重かった  
容体から、油断のできないように両親たちは今も見て、心配して  
いるのが道理なことに思えて、源氏はまだ恋人などの家を微行で  
訪うようなことをしないのである。夫人はまだ衰弱がはなはだし  
くて、病気から離れたとは見えなかつたから、夫婦らしく同室で  
暮らすことはなくて、源氏は小さいながらもまばゆいほど美しい  
若君の愛に没頭していた。非常に大事がっているのである。自家

の娘から源氏の子が生まれて、すべてのことが理想的になつていくと、大臣は喜んでいたのであるが、あおい葵夫人のかいふく恢復が遅々としていたのだけを気がかりに思っていた。しかしあんなに重体であったあとはこれを普通としなければならぬと思つてもいるであろうから、大臣の幸福感はたいして割引きしたものである。若君の目つきの美しさなどが東宮と非常によく似ているのを見ても、何よりも恋しく幼い皇太弟をお思いする源氏は、御所のそちらへ上がらないでいることに堪えられなくなつて、出かけようとした。

「御所などへあまり長く上がらないで気が済みませんから、今日私ははじめてあなたから離れて行こうとするのですが、せめて近

い所に行つて話をしてからにしたい。あまりよそよそし過ぎます。こんなのでは」

と源氏は夫人へ取り次がせた。

「ほんとうにそうでございますよ。体裁を気にあそばすあなた様がたのお間柄ではないのでございますから。あなた様が御衰弱していらつしやいまして、物越しなどでお話しになればいかがでしょう」

こう女房が夫人に忠告をして、病床の近くへ座を作つたので、源氏は病室へはいつて行つて話をした。夫人は時々返辞もするがまだずいぶん様子が弱々しい。それでも絶望状態になつていたころのことを思うと、夢のような幸福にいと源氏は思わずにはい



られないのである。不安に堪えられなかつたころのことを話しているうちに、あの呼吸も絶えたように見えた人が、にわかにいるんなことを言い出した光景が目には浮かんできて、たまらずいやな気がするので源氏は話を打ち切ろうとした。

「まああまり長話はよしましょう。いろいろと聞いてほしいこともありますがね。まだまだあなたはだるそうで気の毒だから」

こう言つたあとで、

「お湯をお上げするがいい」

と女房に命じた。病妻の良人おつとらしいこんな気のつかい方をする

源氏に女房たちは同情した。非常な美人である夫人が、衰弱しきつて、あるかないかのようになつて寝ているのは痛々しく可憐かれんで

あつた。少しの乱れもなくはらはらと枕まくらにかかった髪かみの美しさは男の魂を奪うだけの魅力があつた。なぜ自分は長い間この人を飽き足らない感情を持つて見ていたのであるうかと、不思議なほど長くじつと源氏は妻を見つめていた。

「院の御所などへ伺つて、早く歸つて来ましよう。こんなふうにして始終逢うことができればうれしいでしょうが、宮様がじつと付いていらつしやるから、ぶしつけにならないかと思つて御遠慮しながら蔭かげで煩悶はんもんをしていた私にも同情ができるでしょう。だから自分でも早くよくなろうと努めるようにしてね、これまでのように私たちでいっしよにいられるようになってください。あまりお母様にあなたが甘えるものだから、あちらでもいつまでも子

供のようにお扱いになるのですよ」

などと言い置いてきれいに装束した源氏の出かけるのを病床の夫人は平生よりも熱心にながめていた。

秋の官吏の昇任の決まる日であつたから、大臣も参内したので、子息たちもそれぞれの希望があつてこのごろは大臣のそばを離れまいとしているのであるから皆続いてそのあとから出て行つた。

いる人数が少なくなつて、邸内が静かになつたところに、葵の君はにわかには胸がせきあげるようにして苦しみ出したのである。御所へ迎えの使いを出す間もなく夫人の息は絶えてしまった。左大臣も源氏もあわてて退出して来たので、除目じもくの夜であつたが、この障りさわで官吏の任免は決まらずに終わつた形である。若い夫人の突

然の死に左大臣邸は混乱するばかりで、夜中のことであつたから  
叡<sup>えいざん</sup>山の座主<sup>ざす</sup>も他の僧たちも招く間がなかつた。もう危篤な状態  
から脱したものととして、だれの心にも油断のあつた隙<sup>すき</sup>に、死が忍  
び寄つたのであるから、皆<sup>ぼうぜん</sup>呆然としてゐる。所々の慰問使が集  
まつて来ていても、挨拶<sup>あいさつ</sup>の取り次ぎを託されるような人もなく、  
泣き声ばかりが邸内に満ちてゐた。大臣夫婦、故人の良人<sup>おとと</sup>である  
源氏の歎<sup>なげ</sup>きは極度のものであつた。これまで物怪<sup>もののけ</sup>のため<sup>のため</sup>に一時  
的な仮死状態になつたこともたびたびあつたのを思つて、死者と  
して枕を直すこともなく、二、三日はなお病夫人として寝させて、  
蘇生<sup>そせい</sup>を待つていたが、時間はすでに亡骸<sup>なきがら</sup>であることを証明する  
ばかりであつた。もう死を否定してみる理由は何一つないことを

だれも認めたのである。源氏は妻の死を悲しむとともに、人生の厭いとわしさが深く思われて、所々から寄せてくる弔問の言葉も、どれもうれしく思われなかつた。院もお悲しみになつてお使いをくだされた。大臣は娘の死後の光栄に感激する涙も流しているのである。人の忠告に従い蘇生の術として、それは遺骸いがいに対して傷いたましい残酷な方法で行なわれることまでも大臣はさせて、娘の息の出てくることを待っていたが皆だめであつた。もう幾日かになるのである。いよいよ夫人を鳥辺野とりべのの火葬場へ送ることになつた。こうしてまた人々は悲しんだのである。左大臣の愛嬢として、源氏の夫人として葬送つらなの式に列つらなる人、念仏のために集められた寺々の僧、そんな人たちで鳥辺野がうずめられた。院はもとよりのこ

と、お后方、東宮から賜わった御使いが次々に葬場へ参着して弔詞を読んだ。悲しみにくれた大臣は立ち上がる力も失っていた。「こんな老人になつてから、若盛りの娘に死なれて無力に私は泣いているじゃないか」

恥じてこう言つて泣く大臣を悲しんで見ぬ人もなかつた。夜通しかかつたほどの大がかりな儀式であつたが、終局は煙にすべく遺骸を広い野に置いて来るだけの寂しいことになつて皆早暁に歸つて行つた。死はそうしたものであるが、前さきに一人の愛人を死なせただけの経験よりない源氏は今また非常な哀感を得たのである。八月の二十日過ぎありあけづきの有明月のあるころで、空の色も身にしむるのである。亡なき子を思つて泣く大臣の悲歎に同情しながらも見るに

忍びなくて、源氏は車中から空ばかりを見ることになった。

昇<sup>のぼ</sup>りぬる煙はそれと分<sup>わ</sup>かねどもなべて雲井の哀れなるかな

源氏はこう思ったのである。家へ帰っても少しも眠れない。故人と二人の長い間の夫婦生活を思い出して、なぜ自分は妻に十分の愛を示さなかったであろう、信頼していてさえもらえば、異性に対する自分の愛は妻に帰るよりほかはないのだと暢<sup>のんき</sup>気に思つて、一時的な衝動を受けては恨めしく思わせるような罪をなぜ自分は作つたのであろう。そんなことで妻は生<sup>しょう</sup>涯<sup>がい</sup>心から打ち解けてくれなかったのだなどと、源氏は悔やむのであるが今はもう

何のかいのある時でもなかつた。淡鈍うすにび色の喪服を着るのも夢のような気がした。もし自分が先に死んでいたら、妻はこれよりも濃い色の喪服を着て歎いているであろうと思つてもまた源氏の悲しみは湧わき上がってくるのであつた。

限りあればうす墨衣浅けれど涙ぞ袖そでを淵ふちとなしける

と歌つたあとでは念誦ねんずをしている源氏の様子は限りもなく艶えんであつた。経を小声で読んで「法界三昧ざんまい普賢大士」と言つている源氏は、仏勤めをし馴なれた僧よりもかえつて尊く思われた。若君を見ても「結び置かたみの子だになかりせば何に忍ぶの草を摘



ままし」こんな古歌が思われていつそう悲しくなつたが、この形見だけでも残して行つてくれたことに慰んでいなければならぬとも源氏は思った。左大臣の夫人の宮様は、悲しみに沈んでお寝やすみになつたきりである。お命も危あぶなく見えることにまた家の人々はあわてて祈祷きとうなどをさせていた。寂しい日はずんずん立つていつて、もう四十九日の法会ほうえの仕度したくをするにも、宮はまったく予期あそばさないことであつたからお悲しかった。欠点の多い娘でも死んだあとでの親の悲しみはどれほど深いものかしれない、まして母君のお失いになつたのは、貴女きじよとして完全に近いほどの姫君なのであるから、このお歎きは至極道理なことで申さねばならない。ただ姫君が一人であるということも寂しくお思ひになつた宮であ

つたから、その唯一の姫君をお失いになつたお心は、袖そでの上に置いた玉の碎けたよりももつと惜しく残念なことでおありになつたに違いない。

源氏は二条の院へさえもまつたく行かないのである。専念に仏勤めをして暮らしているのであつた。恋人たちの所へ手紙だけは送つていた。六条の御息所みやすどころは左衛門さえもんの庁舎へ齋宮がおはいりになつたので、いつそう嚴重になつた潔斎的な生活に喪中の人の交渉を遠慮する意味に託たくしてその人へだけは消息もしないのである。早くから悲觀的に見ていた人生がいつそうこのごろいとわしくなつて、将来のことまでも考えてやらねばならぬ幾人かの情人たち、そんなものがなければ僧になつてしまふがと思ふ時に、源氏の目

に真まつさき先に見えるものは西の対の姫君の寂しがつている面影であつた。夜は帳台の中へ一人で寝た。侍女たちが夜の宿直とのいにおおぜいでそれを巡つてすわつていても、夫人のそばにいないことは限りもない寂しいことであつた。「時しもあれ秋やは人の別るべき有るを見るだに恋しきものを」こんな思いで源氏は寝ざめがちであつた。声のよい僧を選んで念仏をさせておく、こんな夜の明け方などの心持ちは堪えられないものであつた。秋が深くなつたこのごろの風の音が身にしむのを感じる、そうしたある夜明けに、白菊が淡うすいろ色を染めだした花の枝に、青がかつた灰色の紙に書いた手紙を付けて、置いて行つた使いがあつた。

「氣どつたことをだれがするのだらう」

と源氏は言つて、手紙をあけて見ると御息所の字であつた。

今まで御遠慮してお尋ねもしないでおりました私の心持ちはおわかりになつていらつしやることでしようか。

人の世を哀れときくも露けきにおくるる露を思ひこそやれ

あまりに身にしむ今朝けさの空の色を見ていまして、つい書きたくなつてしまつたのです。

平生よりもいつそうみごとに書かれた字であると源氏はさすがにすぐに下へも置かれずにながめながらも、素知らぬふりの慰問状であると思つたと恨めしかつた。たとえあのことがあつたとして

も絶交するのは残酷である、そしてまた名誉を傷つけることになつてはならないと思つて源氏は煩悶はんもんした。死んだ人とはとにかくあれだけの寿命だつたに違いない。なぜ自分の目はああした明らかな御息所の生いきりよう霊を見たのであろうとこんなことを源氏は思つた。源氏の恋が再び帰りがたいことがうかがわれるのである。齋宮の御潔齋中の迷惑にならないであろうかとも久しく考えていたが、わざわざ送つて来た手紙に返事をしないのは無情過ぎると思つて、紫の灰色がかつた紙にこう書いた。

ずいぶん長くお目にかかりませんが、心で始終思つているのです。謹慎中のこうした私に同情はしてくださるでしょうと思ひました。

とまる身も消えしも同じ露の世に心置くらんほどぞはかなき

ですから憎いとお思になることなどいっさい忘れておしまいなさい。忌中の者の手紙などは御覧にならないかと思ひまして私も御無沙汰ごぶさたをしていたのです。

御息所は自宅のほうにいた時であつたから、そつと源氏の手紙を読んで、文意にほのめかしてあることを、心にどがめられていないのでもない御息所はすぐに悟つたのである。これも皆自分の薄命からだうわさと悲しんだ。こんな生霊の噂が伝わって行つた時に院はどう思召おぼしめすだろう。前皇太弟とは御同胞といつても取り分け

お睦むつまじかった、齋宮の将来のことも院へお頼みになって東宮はお薨かくれになったので、その時代には第二の父になってやろうという仰せがたびたびあつて、そのまままた御所で後宮生活をするようにとまで仰せになった時も、あるまじいこととして自分は御辞退をした。それであるのに若い源氏と恋をして、しまいには悪名を取るようになるのかと御息所は重苦しい悩みを心にして健康もすぐれなかった。この人は昔から、教養があつて見識の高い、趣味の洗練された貴婦人として、ずいぶん名高い人になっていたの  
で、齋宮が野の宮へいよいよおはいりになると、そこを風流な遊び場として、殿上役人などの文学好きな青年などは、はるばる嵯さ峨がへまで訪問に出かけるのをこのごろの仕事にしているという噂

が源氏の耳にはいると、もつともなことであると思つた。すぐれた芸術的な存在であることは否定できない人である。悲観してしまつて伊勢へでも行かれたらずいぶん寂しいことであろうと、さすがに源氏は思つたのである。

日を取り越した法会ほうえはもう済んだが、正しく四十九日まではこの家で暮らそうと源氏はしていた。過去に経験のない独り棲ひとずみをとする源氏に同情して、現在の三位中將さんみは始終訪ねて来て、世間話も多くこの人から源氏に伝わつた。まじめな問題も、恋愛事件もある。滑稽こっけいな話題にはよく源典侍げんてんじがなつた。源氏は、「かわいそうに、お祖母様ばあを安つぽく言つちやいけないね」と言いながらも、典侍のことは自身にもおかしくてならないふ



うであつた。常陸ひたちの宮の春の月の暗かつた夜の話も、そのほかの互いの情事の素破すっぱ抜きもした。長く語っているうちにそうした話は皆影をひそめてしまつて、人生の寂しさを言う源氏は泣きなどもした。

さつと通り雨がした後の物の身にしむ夕方に中将は鈍色にびの喪服の直衣指貫のうしを今までのよりは淡い色うすのに着かえて、力強い若さにあふれた、公子らしい風采ふうさいで出て来た。源氏は西側の妻戸の前の高欄にからだを寄せて、霜枯れの庭をながめている時であつた。荒い風が吹いて、時雨しぐれもばらばらと散るのを見ると、源氏は自分の涙と競うもののように思った。「相逢あひあひ相失あひあひ」と口ずさみながら頬杖ほおづえ如夢ゆめのごとし、為雨あめ為雲あめとやなるくもとやなるいまはしらず今不知いまはしらず」

をついた源氏を、女であれば先だつて死んだ場合に魂は必ず離れて行くまいと好色な心に中将を思つて、じつとながめながら近づいて来て一礼してすわつた。源氏は打ち解けた姿でいたのであるが、客に敬意を表するために、直衣の紐ひもだけは掛けた。源氏のほうは中将よりも少し濃い鈍色にきれいな色の紅の単衣ひとえを重ねていた。こうした喪服姿はきわめて艶えんである。中将も悲しい目つきで庭のほうをながめていた。

雨となりしぐるる空の浮き雲をいづれの方と分わきてながめん

どこだかわからない。

と独ひとりごと言ことのように言ことつているのに源氏は答えて、

見し人の雨となりにし雲井さへいとど時雨しぐれに搔かきくらす頃ころ

というのに、故人を悲しむ心の深さが見えるのである。中將はこれまで、院の思おぼしめ召めしと、父の大臣の好意、母宮の叔母君おばである關係、そんなものが源氏をここに引き止めているだけで、妹を熱愛するとは見えなかつた、自分はそれに同情も表していたつもりであるが、表面とは違つた動かぬ愛を妻に持っていた源氏であつたのだとこの時はじめて気がついた。それによつてまた妹の死が惜しまれた。ただ一人の人がいなくなつただけであるが、家の

中の光明をことごとく失つたようにだれもこのごろは思っているのである。源氏は枯れた植え込みの草の中に竜胆りんどうや撫子なでしこの咲いているのを見て、折らせたのを、中将が帰つたあとで、若君の乳母めのとの宰相の君を使いにして、宮様のお居間へ持たせてやった。

草枯れの籬まがきに残る撫子を別れし秋の形見とぞ見る

この花は比較にならないものとあなた様のお目には見えるでございませう。

こう挨拶あいさつをさせたのである。撫子にたとえられた幼児はほんとうに花のようであつた。宮様の涙は風の音にも木の葉より早く

散るころであるから、まして源氏の歌はお心を動かした。

今も見てなかなか袖そでを濡ぬらすかな垣かきほあれにしやまと撫子

というお返辞があつた。

源氏はまだつれづれさを紛らすことができなくて、朝顔あさがおの女にょお

王うへ、情味のある性質の人は今日の自分を哀れに思ってくれるであろうという頼みがあつて手紙を書いた。もう暗かつたが使いを出したのである。親しい交際はないが、こんなふうにしたま手紙の来ることはもう古くからのことで馴なれている女房はすぐに女王へ見せた。秋の夕べの空の色と同じ唐紙とうしに、

わきてこの暮くれこそ袖そでは露けけれ物思ふ秋はあまた経ぬれど

「神無月いつも時雨は降りしかど」というように。

と書いてあつた。ことに注意して書いたららしい源氏の字は美しかった。これに対してもと女房たちが言い、女王自身もそう思つたので返事は書いて出すことになつた。

このごろのお寂しい御起居は想像いたしながら、お尋ねすることもまた御遠慮されたのでございます。

秋霧に立ちおくれぬと聞きしより時雨しぐるる空もいかがとぞ思

ふ

とだけであつた。ほのかな書きようで、心憎さの覚えられる手紙であつた。結婚したあとに以前恋人であつた時よりも相手がよく思われることは稀まれなことであるが、源氏の性癖からもまだ得られない恋人のすることは何一つ心を惹ひかないものはないのである。冷静は冷静でもその場合場合に同情を惜しまない朝顔の女王とは永久に友愛をかわしていく可能性があると源氏は思った。あまりに非凡な女は自身の持つ才識がかえつて禍わざわいにもなるものであるから、西の対の姫君をそうは教育したくないとも思っていた。自分が帰らないことでどんなに寂しがっていることであらうと、

紫の女王のあたりが恋しかつたが、それはちやうど母親を亡くした娘を家に置いておく父親に似た感情で思うのであつて、恨まれないか、疑つてはいないだろうかと不安なようなことはなかつた。

すつかり夜になつたので、源氏は灯を近くへ置かせてよい女房たちだけを皆居間へ呼んで話し合ふのであつた。中納言の君というのはずっと前から情人關係になつてゐる人であつたが、この忌中はかえつてそうした人として源氏が取り扱わないのを、中納言の君は夫人への源氏の志としてそれをうれしく思つた。ただ主従としてこの人ともきわめて睦むつまじく語つてゐるのである。

「このごろはだれとも毎日こうしていっしよに暮らしているのだ



から、もうすっかりこの生活に馴なれてしまった私は、皆といつしよにいられなくなったら、寂しくないだろうか。奥さんの亡なくなつたことは別として、ちよつと考えてみても人生にはいろいろな悲しいことが多いね」

と源氏が言うのと、初めから泣いているものもあつた女房たちは、皆泣いてしまつて、

「奥様のことは思い出しますだけで世界が暗くなるほど悲しゅうございますが、今度またあなた様がこちらから行つておしまひになつて、すっかりよその方におなりあそばすことを思いますと」

言う言葉が終わりまで続かない。源氏はだれにも同情の目を向けながら、

「すっかりよその人になるようなことがどうしてあるものか。私をそんな軽薄なものと見ているのだね。氣長に見ていてくれる人があればわかるだろうがね。しかしまた私の命がどうなるだろう、その自信はない」

と言つて、灯ひを見つめている源氏の目に涙が光っていた。特別に夫人がかわいがつていた親もない童女が、心細そうな顔をして、いるのを、もつともであると源氏は哀れに思った。

「あてきはもう私にだけしかかわいがつてもらえない人になつたのだね」

源氏がこう言うと、その子は声を立てて泣くのである。からだ相応な短い袖あこめを黒い色にして、黒い汗かきみ衫かばに樺色はかまの袴はかまという姿も可か

憐れんであつた。

「奥さんのことを忘れない人は、つまらなくても我慢して、私の小さい子供といつしよに暮らしててください。皆が散り散りになつてしまつてはいつそう昔が影も形もなくなつてしまふからね。心細いよそんなことは」

源氏が互いに長く愛を持つていこうと行つても、女房たちはさうだろうか、昔以上に待ち遠しい日が重なるのではないかと不安でならなかつた。

大臣は女房たちに、身分や年功で差をつけて、故人の愛した手まわりの品、それから衣類などを、目に立つほどにはしないで上品に分けてやつた。

源氏はこうした籠居こもりいを続けていられないことを思つて、院の御所へ今日は伺うことにした。車の用意がされて、前驅の者が集まつて来た時分に、この家の人々と源氏の別れを同情してこぼす涙のような時雨しぐれが降りそそいだ。木の葉をさつと散らす風も吹いていた。源氏の居間にいた女房は非常に皆心細く思つて、夫人の死から日がたつて、少し忘れていた涙をまた滝のように流していた。今夜から二条の院に源氏の泊まることを予期して、家従や侍はそちらで主人を迎えようと、だれも皆仕度したくをととのえて帰ろうとしているのである。今日ですべてのことが終わるのではないが非常に悲しい光景である。大臣も宮もまた新しい悲しみを感じておいでになった。宮へ源氏は手紙で御挨拶あいさつをした。

院が非常に逢あいたく思おぼしめ召めすようですから、今日はこれからそちらへ伺まうつもりでございます。かりそめにもせよ私がこうして外へ出かけたなりいたすようになってみますと、あれほどの悲しみをしながらよくも生きていたというような不思議な気がいたします。お目にかかりましてはいつそう悲しみに取り乱しそうですね。不安がございますから上がりません。

というのである。宮様のお心に悲しみがつのつて涙で目もお見えにならない。お返事はなかった。しばらくして源氏の居間へ大臣が出て来た。非常に悲しんで、袖そでを涙の流れる顔に当てたままである。それを見る女房たちも悲しかった。人生の悲哀の中に包まれて泣く源氏の姿は、そんな時も艶えんであった。大臣はやつとも

のを言い出した。

「年を取りますと、何でもないことにもよく涙が出るものですが、ああした打撃がやって来たのですから、もう私は涙から解放される時間といつてはございません。私がこんな弱い人間であることを人に見せたくないものですから、院の御所へも伺候しないのでございます。お話のついでにあなたからよろしくお取りなしになつておいてください。もう余命いくばくもない時になつて、子に捨てられましたことが恨めしゅうございます」

一所懸命に悲しみをおさえながら言うことはこれであつた。源氏も幾度か涙を飲みながら言つた。

「いつだれが死に取られるかしのれないのが人生の相であると承知

しておりまして、目前にそれを体験しましたわれわれの悲しみは理窟りくつで説明も何もできません。院にもあなたの御様子をよく申し上げます。必ず御同情をあそばすでしょう」

「それではもうお出かけなさいませ。時雨しぐれがあとからあとから追っかけて来るようですから、せめて暮れないうちにおいでになるがよい」

と大臣は勧めた。源氏が座敷の中を見まわすと几帳きちょうの後ろとか、襖からかみ子の向こうとか、ずっと見える所に女房の三十人ほどが幾つものかたまりを作っていた。濃い喪服も淡鈍うすにび色も混じっているのである。皆心細そうにめいっただふうであるのを源氏は哀れに思った。

「御愛子もここにいられるのだから、今後この邸やしきへお立ち寄りになることも決してないわけでないと私どもはみずから慰めておりますが、単純な女たちは、今日限りこの家はあなた様の故郷にだけなってしまうのだと悲観しておりまして、生死の別れをした時よりも、時々おいでの節御用を奉仕させていただきました幸福が失われたようにお別れを悲しがつておりますのももつとも思われます。長くずっと来てくださるようなことはございませんでしたが、そのころ私はいつかはこうでない幸いが私の家へまわって来るものと信じたり、その反対な寂しさを思ってみたりしたものです。とにかく今日の夕方ほど寂しいことはございません」と大臣は言ってもまた泣くのである。



「つまらない忬そんたく度をして悲しがる女房たちですね。ただ今のお言葉のように、私はどんなことも自分の信頼する妻は許してくれるものと暢のんき気に思っておりまして、わがままに外を遊びまわりまして御無沙汰ごぶさたをするようなこともありましたが、もう私をかばってくれる妻がいなくなつたのですから私は暢気な心などを持っていられるわけありません。すぐにまた御訪問をしましょう」

と言つて、出て行く源氏を見送つたあとで、大臣は今日まで源氏の住んでいた座敷、かつては娘夫婦の暮らした所へはいつて行つた。物の置き所も、してある室内の裝飾も、以前と何一つ変わつていないが、はなはだしく空虚なものに思われた。帳台の前には硯すずりなどが出ていて、むだ書きをした紙などもあつた。涙をしい

て払つて、目をみはるようにして大臣はそれを取つて読んでいた。若い女房たちは悲しんでいながらもおかしがった。古い詩歌がたくさん書かれてある。草書そうしょもある、楷書かいしょもある。

「上手じょうずな字だ」

歎息たんそくをしたあとで、大臣はじつと空間をながめて物思わしいふうをしていた。源氏が婿でなくなつたことが老大臣には惜しんでも惜しんでも足りなく思えるらしい。「旧枕きうちん故衾こきん誰たれ与とも共に」  
という詩の句の書かれた横に、

亡なき魂たまぞいとど悲しき寝とこし床とこのあくがれがたき心ならひに

と書いてある。「ゑんあうかはらにひえてさうくわおもし 鴛鴦瓦冷霜花重」と書いた所にはこう書かれてある。

君なくて塵積ちりもりぬる床なつの露うち払ひいく夜寝いぬらん

ここにはいつか庭から折らせて源氏が宮様へ贈つたのと同じ時の物らしい撫なで子しこの花の枯れたのがはさまれていた。大臣は宮にそれらをお見せした。

「私がこれほどかわいい子供というものがあるだろうかと思うほどかわいかった子は、私と長く親子の縁を続けて行くことのできない因縁の子だったかと思うと、かえってなまじい親子でありえ

たことが恨めしいと、こんなふうにして思つて忘れようとするのですが、日がたつにしたがつて堪えられなく恋しくなるのをどうすればいいかと困っている。それに大将さんが他人になつておしまいになることがどうしても悲しくてならない。一日二日と中があき、またずっとおいでにならない日のあつたりした時でさえも、私はあの方にお目にかかれないことで胸が痛かつたのです。もう大将を一家の人と見られなくなつて、どうしても私は生きていられるか」

とうとう声を惜しまずに大臣は泣き出したのである。部屋にいた少し年配な女房たちが皆同時に声を放つて泣いた。この夕方の家の中の光景は寒気さむけがするほど悲しいものであつた。若い女房た

ちはあちらこちらにかたまつて、それはまた自身たちの悲しみを語り合つていた。

「殿様がおつしやいますようにして、若君にお仕えして、私はそれを悲しい慰めにしようと思つていますけれど、あまりにお形見は小さい公子様ですわね」

と言う者もあつた。

「しばらく実家へ行つていて、また来るつもりです」

こんなふう希望している者もあつた。自分らどうしの別れも相当に深刻に名残惜なごりしがつた。

院では源氏を御覧になつて、

「たいへん瘦やせた。毎日精進をしていたせいかもしれない」

と御心配をあそばして、お居間で食事をおさせになったりした。いろいろとおいたわりになる御親心を源氏はもつたいなく思った。ちゆうぐう  
中宮の御殿へ行くと、女房たちは久しぶりの源氏の伺候を珍しがって、皆集まって来た。中宮も命みょうぶ婦を取り次ぎにしてお言葉があった。

「大きな打撃をお受けになったあなたですから、時がたちましてもなかなかお悲しみはゆるくなるようなこともないでしょう」

「人生の無常はもうこれまでにいろいろなことで教訓されて参つた私でございませうが、目前にそれが証明されてみますと、厭世えんせい的にならざるをえませんで、いろいろと煩悶はんもんをいたしました。が、たびたびかたじけないお言葉をいただきましたことによりまして、

今日までこうしていることができたのでございます」

と源氏は挨拶あいさつをした。こんな時でなくても心の湿ったふうのよく見える人が、今日はまたそのほかの寂しい影も添って人々の同情を惹ひいた。無紋の袍ほうに灰色の下した襲がさねで、冠かむりは喪中の人の用いる巻けん纓えいであつた。こうした姿は美しい人に落ち着おきを加えるもので艶えんな趣が見えた。東宮へも久しく御無沙汰ごぶさた申し上げていることが心苦しくてならぬというような話を源氏は命婦にして夜ふけになつてから退出した。

二条の院はどの御殿もきれいに掃除そうじができていて、男女が主人の帰りを待ちうけていた。身分のある女房も今日は皆そろつて出ている。はなやかな服装をしてきれいに粧よそおっているこの女房たち

を見た瞬間に源氏は、気をめいらせはてた女房が肩を連ねていた、左大臣家を出た時の光景が目には浮かんで、あの人たちが哀れに思われてならなかった。源氏は着がえをしてから西の対<sup>たい</sup>へ行つた。残らず冬期の装飾に変えた座敷の中がはなやかに見渡された。若い女房や童女たちの服装も皆きれいにさせてあつて、少納言の計らいに敬意が表されるのであつた。紫の女王<sup>にょおう</sup>は美しいふうをしてすわっていた。

「長くお逢<sup>あ</sup>いしなかつたうちに、とても大人になりましたね」

几帳<sup>きちよう</sup>の垂<sup>た</sup>れ絹を引き上げて顔を見ようとすると、少しからだを小さくして恥<sup>は</sup>ずかしそうにする様子に一点の非も打たれぬ美しさが備わっていた。灯<sup>ひ</sup>に照らされた側面、頭の形などは初恋の日



から今まで胸の中へ最もたいせつなものとしましてしまつてある人の面影と、これとは少しの違つたものでもなくなつたと知ると源氏はうれしかった。そばへ寄つて逢えなかつた間の話など少ししてから、

「たくさん話はたまつていますから、ゆつくりと聞かせてあげたいのだけれど、私は今日まで忌いみにこもつていた人なのだから、気味が悪いでしょう。あちらで休息することにしてまた来ましょう。もうこれからはあなたとばかりいるのだから、しまいにはあなたからうるさがられるかもしれませんよ」

立ちぎわにこんなことを源氏が言つていたので、少納言は聞いてうれしく思ったが、全然安心したのではない、りっぱな愛人の

多い源氏であるから、また姫君にとつては面<sup>めんどう</sup>倒な夫人が代わり  
に出現するのではないかと疑つていたのである。

源氏は東の対へ行つて、中将という女房に足などを撫<sup>な</sup>でさせな  
がら寝たのである。翌朝はすぐにまた大臣家にいる子供の乳母<sup>めのと</sup>へ  
手紙を書いた。あちらからは哀れな返事が来て、しばらく源氏を  
悲しませた。つれづれな独居生活であるが源氏は恋人たちの所へ  
通つて行くことも気が進まなかつた。女王がもうりつぱな一人前<sup>きじよ</sup>  
の貴女に完成されているのを見ると、もう実質的に結婚をしても  
よい時期に達しているように思えた。おりおり過去の二人の間で  
かわしたことのないような戯<sup>じょうだん</sup>談を言いかけても紫の君にはそ  
の意が通じなかつた。つれづれな源氏は西の対にばかりいて、姫

君と扁へんかく隠しの遊びなどをして日を暮らした。相手の姫君のすぐれた芸術的な素質と、頭のよさは源氏を多く喜ばせた。ただ肉親のように愛撫あいぶして満足ができた過去とは違つて、愛すれば愛するほど加わつてくる悩ましきは堪えられないものになつて、心苦しい処置を源氏は取つた。そうしたことの前もあと女房たちの目には違つて見えることもなかつたのであるが、源氏だけは早く起きて、姫君が床を離れない朝があつた。女房たちは、

「どうしてお寝やすみになつたままなのでしよう。御気分がお悪いのじやないかしら」

とも言つて心配していた。源氏は東の対へ行く時に硯すずりの箱を帳台の中へそつと入れて行つたのである。だれもそばへ出て来そう

でない時に若紫は頭を上げて見ると、結んだ手紙が一つ枕まくらの横にあつた。なにげなしにあけて見ると、

あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがに馴なれし中の衣を

と書いてあるようであつた。源氏にそんな心のあることを紫の君は想像もして見なかつたのである。なぜ自分はあるの無法な人を信賴してきたのであろうと思うと情けなくてならなかつた。昼ひるごろに源氏が来て、

「気分がお悪いって、どんなふうなのですか。今日は暮くもいっしよに打たないで寂しいじゃありませんか」

のぞきながら言うとますます姫君は夜着を深く被かいてしまかずうのである。女房が少し遠慮をして遠くへ退のいて行つた時に、源氏は寄り添よつて言つた。

「なぜ私に心配をおさせになる。あなたは私を愛していてくれるのだと信じていたのにそうじゃなかつたのですね。さあ機嫌きげんをお直なしなさい、皆が不審がりますよ」

夜着をめくると、女王は汗をかいて、額髪ぬもぐつしよりと濡ぬれていた。

「どうしたのですか、これは。たいへんだ」

いろいろと機嫌をとつても、紫の君は心から源氏を恨めしくなっているふうで、一言もものを言わない。

「私はもうあなたの所へは来ない。こんなに恥ずかしい目にあわせるのだから」

源氏は恨みを言いながら硯箱をあけて見たが歌ははいっていなかった。あまりに少女らしい人だと可憐かれんに思つて、一日じゆうそばについていて慰めたが、打ち解けようともしない様子がいつそうこの人をおかわゆく思わせた。

その晩は亥いの子の餅もちを食べる日であつた。不幸のあつたあとの源氏に遠慮をして、たいそうにはせず、西の対へだけ美しい檜ひわ破わ子りごう詰めの物をいろいろに作つて持つて来てあつた。それらを見た源氏が、南側の座敷へ来て、そこへ惟これみつ光を呼んで命じた。

「餅をね、今晚のようにたいそうにしないでね、明日の日暮れご

ろに持って来てほしい。今日は吉日じゃないのだよ」

微笑しながら言っている様子で、利巧りこうな惟光はすべてを察してしまった。

「そうでございませうとも、おめでたい初めのお式は吉日を選びませんでは。それにいたしましたしても、今晚の亥の子でない明晩の子餅ねはどれほど作ってまいったものでございませう」

まじめな顔で聞く。

「今夜の三分の一くらい」

と源氏は答えた。心得たふうで惟光は立つて行つた。きまりを悪がらせない世馴よなれた態度が取れるものだと思つた。だれにも言わずに、惟光はほとんど手ずからといつてもよいほどにし

て、主人の結婚の三日の夜の餅の調製を家でした。源氏は新夫人の機嫌きげんを直させるのに困つて、今度はじめて盗み出して来た人を扱うほどの苦心を要すると感じることによつても源氏は興味を覚えずにいられない。人間はあさましいものである、もう自分は一夜だつてこの人と別れていられようとも思えないと源氏は思うのであつた。命ぜられた餅を惟光はわざわざ夜ふけになるのを待つて持つて来た。少納言のような年配な人に頼んではきまり悪くお思いになるだろうと、そんな思いやりもして、惟光は少納言の娘の弁という女房を呼び出した。

「これはまちがいなく御寢室のお枕まくらもとへ差し上げなければならぬ物なのですよ。お頼みます。たしかに」



弁はちよつと不思議な気はしたが、

「私はまだ、いいかげんなごまかしの必要なような交渉をだれともしたことがありますわ」

と言いながら受け取った。

「そうですよ、今日はそんな不誠実とか何とかいう言葉を慎まなければならなかつたのですよ。私ももう縁起のいい言葉だけを選よつて使います」

と惟光は言つた。若い弁は理由のわからぬ気持ちのまま、主人の寢室の枕まくらもとの几帳きちょうの下から、三日の夜の餅のはいつた器を中へ入れて行つた。この餅の説明も新夫人に源氏が自身でしたに違いない。だれも何の気もつかなくつたが、翌朝その餅の箱が

寢室から下げられた時に、側近している女房たちにだけはうなずかれることがあつた。皿などもいつ用意したかと思うほど見事な華足けそく付きであつた。餅もことにきれいに作られてあつた。少納言は感激して泣いていた。結婚の形式を正しく踏んだ源氏の好意がうれしかつたのである。

「それにしても私たちへそつとお言いつけになればよろしいのね。あの人が不思議に思わなかつたでしようかね」

とささやいていた。

若紫と新婚後は宮中へ出たり、院へ伺候していたりする間も絶えず源氏は可憐かれんな妻の面影を心に浮かべていた。恋しくてならぬのである。不思議な変化が自分の心に現われてきたと思つてい

た。恋人たちの所からは長い途絶えを恨めしがった手紙も来るのであるが、無関心ではいられないものもそれらの中にはあつても、新婚の快い酔いに身を置いている源氏に及ぼす力はきわめて微弱なものであつたに違いない。厭<sup>えんせい</sup>世的になつているといふふうを源氏は表面に作つていた。いつまでこんな気持ちが続くかしらぬが、今とはすつかり別人になりえた時に逢<sup>あ</sup>いたいと思うと、こんな返事ばかりを源氏は恋人にしていたのである。

皇太后は妹の六の君がこのごろもまだ源氏の君を思つているところから父の右大臣が、

「それもいい縁のようだ、正夫人が亡<sup>な</sup>くなられたのだから、あの方も改めて婿にすることは家の不名誉では決してない」

と言っているのに憤慨しておいになつた。

「宮仕えだつて、だんだん地位が上がっていけば悪いことは少しもないのです」

こう言つて宮廷入りをしきりに促しておいになつた。その噂うわさの耳にはいる源氏は、並み並みの恋愛以上のものをその人に持つていたのであるから、残念な気もしたが、現在では紫の女王のほかに分ける心が見いだせない源氏であつて、六の君が運命に従つて行くのもしかたがない。短い人生なのだから、最も愛する一人を妻に定めて満足すべきである。恨みを買うような原因を少しでも作らないでおきたいと、こう思つていた。六条の御息所みやすどころと先夫人の葛藤かつとうが源氏を懲りさせたともいえることであつた。御息

所の立場には同情されるが、同棲どうせいして精神的の融和がそこに見  
いだせるかは疑問である。これまでのような関係に満足して  
くれれば、高等な趣味の友として自分は愛することができ  
る。と源氏は思っているのである。これきり別れてしま  
う心はさすがになかった。

二条の院の姫君が何人なにびとであるかを世間がまだ知らないことは、  
実質を疑わせることであるから、父宮への発表を急がなければ  
ならないと源氏は思つて、裳着もぎの式の用意を自身の従属関係になつ  
ている役人たちにも命じてさせていた。こうした好意も紫の君は  
うれしくなかつた。純粋な信頼を裏切られたのは自分の認識が不  
足だったのであると悔やんでいるのである。目も見合わないよう

にして源氏を避けていた。戯談じょうだんを言いかけられたりすること  
は苦しくてならぬふうである。鬱々うつつと物思わしそうにばかりし  
て以前とはすっかり変わった夫人の様子を源氏は美しいこととも、  
可憐なこととも思っていた。

「長い間どんなにあなたを愛して来たかもしれないのに、あなた  
のほうはもう私がきらいになったというようにしますね。それで  
は私がかわいそうじゃありませんか」

恨みらしく言ってみることもあった。

こうして今年が暮れ、新しい春になった。元日には院の御所へ  
先に伺候してから参内をして、東宮の御殿へも参賀にまわった。  
そして御所からすぐに左大臣家へ源氏は行った。大臣は元日も家

にこもつていて、家族と故人の話をし出しては寂しがらるばかりであつたが、源氏の訪問にあつて、しいて、悲しみをおさえようと  
するのがさも堪えがたそうに見えた。重ねた一歳は源氏の美に重々しさを添えたと大臣家の人は見た。以前にもまさつてきれいで  
もあつた。大臣の前を辞して昔の住居すまいのほうへ行くと、女房たちは珍しがつて皆源氏を見に集まつて来たが、だれも皆つい涙をこぼしてしまふのであつた。若君を見るとしばらくのうちに驚くほど大きくなつていて、よく笑うのも哀れであつた。目つき口もとが東宮にそっくりであるから、これを人が怪しまないであらうかと源氏は見入つていた。夫人のいたころと同じように初春の部屋が装飾してあつた。衣服掛けの棹さおに新調された源氏の春着が掛け

られてあつたが、女の服が並んで掛けられてないことは見た目だけにも寂しい。

宮様の挨拶あいさつを女房が取り次いで来た。

「今日だけはどうしても昔を忘れていなければならぬと辛抱しんぼうしているのですが、御訪問くださいましたことであつてその努力がむだになつてしまいました」

それから、また、

「昔からこちらで作らせますお召し物も、あれからのちは涙で私の視力も曖昧あいまいなんですから不出来にばかりになりましたが、今日だけはこんなものでもお着かえくださいませ」

と言つて、掛けてある物のほかに、非常に凝つた美しい衣裳いしやう



一揃そろいが贈られた。当然今日の着料になる物としてお作らせになつた。下したがさね襲は、色も織り方も普通の品ではなかつた。着ねば力をお落としになるであらうと思つて源氏はすぐに下襲をそれに変えた。もし自分が来なかつたら失望あそばしたであらうと思つて心苦しくてならないものがあつた。お返辞の挨拶は、

「春の参りましたしに、当然参るべき私がお目にかかりに出たのですが、あまりにいろいろなことが思い出されまして、お話を伺いに上げられません。

あまたとし今日改めし色ごろもきては涙ぞ降るここちする

自分をおさえる力もないのでございます」

と取り次がせた。宮から、

新しき年ともいはず降るものはふりぬる人の涙なりけり

という御返歌があつた。どんなにお悲しかったことであろう。

(訳注) 源氏二十二歳より二十三歳まで。

# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年7月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

## 葵

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>